
守護騎士

レイフォルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護騎士

【Nコード】

N2994BA

【作者名】

レイフォルス

【あらすじ】

主人公が乗った自動車が事故に合い、乗っていた家族は皆死んでしまった。重度の重傷を負った主人公が唯一助かる方法とは……？

男から女への性転換モノです。

回想（１）

深く沈んでいた意識が浮上していき、覚醒の兆しを見せる。彩っていた穏やかな黒が白に変換され、薄らと開けた双眸に光が入り込んだ。

最初に視界に映ったのは見覚えのない真っ白な天井。背中からは柔らかな布団の弾力がし、自分が寝ているのだと理解する。

窓が開けられているのか、右側からは涼しげな風が室内に入り込み、頬を撫る。パタパタと揺れるカーテンの隙間からは太陽の陽が差し、光の筋を作り上げていた。

「此処は……何処だ……ッ!？」

自分の絞り出した声を聞いて驚く。口から呟き出された声は聞き慣れた己のモノではなく、何処か甲高い声だった。そして、その声音は良く聞き覚えがあつた。

……一体何が……。俺は確か家族と車で出掛けている筈だった。なのに、何故俺は此処で寝ている……？

母さんと父さん……凜音姉ちゃんは何処……？ 皆は何処に居るんだ……。

家族の顔を順に思い出しながら、義孝は身体を起き上がらせようとす。しかし、

「身体が、動かない……!？」

義孝は愕然とする。腕に力を入れても全く動かず、首を動かすのもやっとの事だった。身体に力が全く入らなかったのだ。

くそっ 何なんだよ！！ 一体何がどうなってるんだ！？ 皆は何処かに行っちゃったし、何故か身体も動かないし、訳が解らないッ！！

一体全体何がどうなっているのか。自分の身に何が起きているのか。何も解らない故に、余計恐怖を煽る。

義孝は意地でも自分の身体を動かそうと、何度も藻掻いた。だが、その行為に意味などなく、たったそれだけの事で息が切れる。

「……ハアハア……マジで、どうなっているんだよ……」

身体のを抜き、グツタリと布団に身を預ける。息を整えながら「ふう」と溜息を付いた時、視界にとあるモノが映り込んだ。

それは細くて白い肌理が細かい手。手首から先は更に括れて細く、水仕事とは縁のなさそうな綺麗な手だった。

だが、これはまだまだほんの序の口だ。開いた窓ガラスに反射して映った己の顔が、姉と同じ、否、“凜音”其の物の顔をした自分が其処に居たのだから……。

あの後、悲鳴を上げた義孝に看護婦が駆け付け、そのまた後に医師

が慌てて部屋にやって来た。

診断された後、何があったのかを問うと、神妙な顔をした医師が一言、「事故にあったんだよ」と告げられた。

更に医師はポツポツと呟きながら、ゆっくりと義孝に説明した。子供の義孝でも解るように、丁寧に。

義孝が乗った自動車は反対車線から飛び出した大型トラックと正面衝突し、大破した。前部座席に乗っていた両親は衝撃で潰れ、即死。痛みも感じる暇はなかったと言う……。

凜音は頭をかなり強く打ち、病院に搬送されても意識が戻らなかった。打ち所が悪かったのか、診断の結果、脳死と判断された……。

そして義孝は重度の重傷を負い、殆ど手の施し様がなかった。このままでは誰も助からないと判断した病院の医師達は義孝の脳を摘出し、ほぼ無傷の凜音の身体に移植したらしい。

この手術は博打と言ってもいい程のものだった。移植に成功したとしても8割以上が意識が戻らないか、身体が拒絶反応を起こして死ぬ確率が高かったからだ。

けれど、義孝は無事に意識が戻り、それから順調に回復していった。

回想（２）

両親が死んでしまった事は矢張りショックだった。だがそれよりも姉を殺してまで生き延びた事実に関心が深く抉られる。

脳死とは言え、凜音はまだ生きていたのだ。脳死は個体の死だと捉える考え方も確かにあるが、それでもまだ生きていた。

義孝は凜音の身体を奪ってまで、生きたくはなかった。それは姉を自分が生きる為に殺す事と同義だから……。

「どうして……なんでこんなことに……」

つい先日までは何処へ行くか楽しく相談し、一緒に笑い合っていたのに、今はもう誰も居ない。一緒に居る所か、笑い掛けてくれる事さえもう二度とない。

まだ１２歳、小学六年生の義孝にとって、家族とは居て当たり前が存在だった。けれど、失って初めて、その存在の尊さに気が付いた。しかし、今頃気付いても時は既に遅い。逝ってしまった人は生き返らないし、二度と還って来る事はないのだ。

何で、こんな事に……。どうして、俺だけが生き残ったんだよ！！

俺も、俺も一緒に死ねば、こんな苦しい思いをしなくて済んだのに……なんで俺だけ置いて逝ったんだよ……。

皆が居ない生活なんて、耐えられない……生きていく、自信なんて

ないよ……。

蘇る記憶、触れ合った時間、楽しかったあの日々をもう迎える事が出来ない……重過ぎる喪失感に義孝は感情を操作出来ず、臆て決壊した。

「うぐつ……うわあああああああああああああああああああああ
ああああ……！！！！！！」

顔を押えて悲痛な声を上げる義孝。眸眸からは大粒の涙がポロポロと零れ落ち、点々とシーツに染みを作る。

母に抱き締められた記憶、父に褒められて嬉しかった瞬間、凜音と遊んだ時間。幸せに満ち溢れていた日々をもう感じる事が出来ない。

許容する事が出来ない現実には心が軋み、悲鳴を上げる。今はそうして泣く事しか、義孝には出来なかった。

もしも、なんて都合のいいモノはない。数え切れないifを並べても、時計の針は逆には回らない。だからこそ、人は今を精一杯に生きるのだ……。

涙が止まらなかった。拭っても拭っても切が無く、壊れたダムの様に瞳から溢れ出る。

愛していたからこそ、大事な人だったからこそ、その悲しみは計り知れない。

整った綺麗な顔は涙と鼻水でグシャグシャになり、折角の美人が台無しだった。義孝が大きな声で泣いて居ても、気を使ったのか、看護婦達は来る事はない。

だからこそ、義孝は一杯泣いた。涙が枯れて、流れ落ちなくなるまでずっと泣いた。

また次の日に、笑顔である為に。いつの日か、家族の死を乗り越え、心の底から笑える日の為に、今はたくさん泣いた……。

余談ではあるが、泣いて居る義孝の病室の前で、心配そうに右往左往している何人かの看護婦が居たとか居ないとか……。

回想（3）

……何時まで落ち込んでいても仕方がない。俺は男なんだから、も
っとしっかりしなきゃ……あつ、今は女か……。

凜音姉ちゃんの分まで一生懸命生きて、絶対幸せになってやる！
それだけしか俺には出来ないけど……俺、頑張るから。

だから、父さん、母さん、凜音姉ちゃん、安心して天国で見えて
くれよな。心配させてしまう事もあるかもしれないけど、絶対に負
けないから。

俺、強くなるから……！

思いつきり泣いた義孝は、幾分か心に余裕を持つ事が出来た。そし
て同時に、使命感の様な熱い想いも一緒に生まれた。

生きられなかった家族の分まで、頑張つて生きようとする意思だ。
自殺なんて馬鹿な事は考えない。

そんな事をしてしまったら、きっと皆に怒られてしまう。人生はゲ
ームの様にやり直しが効かないのだから、今を懸命に生きるしか
ない。

しかし、義孝が自分の身体が凜音の身体へと変わってしまった事を
知ってから、彼は自分の姿を見るのが嫌いになってしまった。

醜い容姿だとか、そんな下らない理由ではない。鏡に映る姉の姿を
見ていると、恨み言を言われそうで怖かったからだ。

「どうしてあたしは死んだのに義孝はあたしの身体で生きているの？」と、責められそうに嫌だった。

記憶に残る優しかった姉はそんな事を言わないと分かっている、人と言ふ者は裏表がある生き物だ。

言葉では否定出来ても、心の中ではその事を否定し切れない。こんな事を思ったらきつと凜音は怒るかもしれないが、それでも鏡に映った自分（姉）の姿を直視出来そうになかった。

それは矢張り、義孝の心の奥底で罪悪感があるからそう思ってしまったのだろう……。

義孝が入院して一週間後、いよいよリハビリが始まった。しかし、肝心の義孝は初日から心が挫けそうになっていた。

う、ぐつ。身体が全然言う事を聞かない……。足が震えて、満足に立つ事さえ出来ないなんて……。

無理に動かそうとすれば凄く痛いし、嫌になってくる……。リハビリがこんなにもキツイものだなんて知らなかった。

だけど、俺は負けないぞ！！これくらいでくたばる程の軟な精神じゃない！！

今まで当たり前に出ていた事がまるで出来ず、泣きそうになる。

けれど、それでも一生懸命前を睨み付け、身体に鞭を打った。

何度倒れようが、その度に立ち上がり、震える身体を動かし続ける。周りから見たその姿は健気だが、痛々しくもあった。

担当の医師、看護婦の人達はそんな義孝の姿を辛そうな顔をして見るが、本当に辛いのは義孝自身。

此処で止めてしまえば彼、ではなく彼女の為にならないし、今は身体を慣らすしかない。

脳の信号を中々受信しない身体を一生懸命動かす義孝の姿を、彼等は少し離れた位置から見守り続けた。

回想（４）

リハビリから３日目。少しずつだが、義孝は何とか歩く事が出来る様になっていた。

まだまだ機械の様なカチコチとしたギコチナイ動きを感じさせるが、初日よりは大分マシになっている。

それからもめげずにリハビリを続けて早や１０日目。今ではもう日常生活では支障が出ない程に身体が動き、医師も驚くほどの回復力を見せ付けた。

身体が同じ血縁者のモノだから早く馴染んだのだろうか？ 医師の話では少なくとも一ヶ月ぐらいいは掛かるらしいのだが、これは嬉しい誤算だった。

そして入院生活ももう何日かで一ヶ月に経とうとしたとある日の朝、義孝はある違和感に目を覚まし、上半身を起こき上がらせる。

寝巻の下、下着が湿っている感覚がし、肌へばり付いて来るのだ。その不快な感触に一瞬顔を顰めた。

「ん……何だ？」

……何か、尻が濡れてる……？ まさか漏らした訳ではないよな……？ いや、でも……一応確認しておこう。万が一って事もあるだろうし。

しかし、この年になってお漏らしは流石に恥ずかしいよな……多分

違うと思うんだけど、お漏らしじゃなかったらこの違和感は何なんだろう……。

寝巻と下着を一緒に脱ぎ、脱いだ下着を見やる。すると、その下着には赤黒い液体がベツトリと付着していた。

「うわっ！？ 何で血が……?!」

思わず目を丸くし、下着を凝視する。結構な量の血が流れたのか、水玉模様の下着は血で塗れていた。

どうして出血が…… 此处から流れ落ちたみたいだけど、別に切れた訳ではないよね……。

見た目は特に異常がないし、解らない。何かの病気だったら嫌だなあ。

秘部からは血が流れた跡が残っており、最初は恥ずかしげに見ていた義孝だったか、段々と不安になってきた。

義孝は直にナースコールのボタンを押し、胸の不安を取り払う為に看護婦を呼ぶのだった。

「ああ、生理ですね」

入院して最初に親しくなった看護婦の千秋ちあきは、血で汚れた下着を見て即答した。

「せ、生理……？」

「ええ、身体が子供から大人になった証ですよ、これは。それでですね——」

そう言うて千秋は最初に病気ではない事を教えると、生理について詳しく解り易く説明し始めた。

女性の身体は、妊娠、出産に対応するように、周期的なリズムがある。

約28日間を1サイクルとし、その中でホルモンの分泌によって卵胞が大きくなって排卵し、子宮が受精卵の生育のために準備をするのだ。

しかし、受精しなかった場合や受精しても妊娠しなかった場合は、子宮で準備したものが全部出血と共に体外に排出される。

これが月経だ。更に女性の身体はホルモンの働きによって体温の变化が起こる。

正常な生理周期は25日～35日に一度の周期で起こり、日数は決まっている。月経が始まった日を第一日目とし、次の月経の前日までの期間が1つの月経周期。

この期間はストレスや体調不良によって左右され易く、2～3日程の差ならば問題はない。最も理想的な周期は28日周期だ。

1回目の生理日数はだいたい3～7日間。4～5日で終わるのが一

般的で、3〜7日範囲内で終わるのであれば問題ない。2〜3日目をピークに出血量が少なくなり、7日目頃に終わるパターンが理想的とも言える。

だらだらと8日以上続いたり、血量が少なく2日ほどで終わる場合は注意が必要だ。

回想（５）

生理の訪れは、義孝にとって自分が女であると再認識させるのには十分だった。

今までトイレや着替え、シャワーを浴びる時などはなるべく意識しない様にしてきた。欲情する訳ではないが、矢張り恥ずかしかったからだ。

しかし、もう自分が子供を出産出来る身体なのだと理解すると、このままでは不味いと言う思いが生まれた。

俺は男じゃなくて女なんだ……女性として知るべき事を知らないのは流石に不味いよな。

生理の事は女性ならまず誰でも知ってる事だし……いい加減俺もこの身体が自分のモノだと認識しないと。

今までは元男として自分の身体を見て恥ずかしがったり、大股で歩いたり、俺口調で話をしていたりした。

それは１２年間、男として生を歩んだ癖と言ってもいい。女の姿でソレを続けていたら女性としてどうだろうか……？

少なくとも、周りからは品の悪い女性だと思われるだろう。義孝としてもそれは嫌だった。

「不味い……果てしなく不味い。他にも色々知るべき事は多いだろうし、此処はまず千秋さんに教えてもらおう」

ナースコールで千秋を指名し、それから数分後に看護婦の千秋が病室にやって来た。

「どうかしましたか？」

「あの……俺に女の子としての基礎を教えてください！」

「……基礎？」

一瞬ポカンとした千秋だったが、直に意味を理解すると、笑顔で頷いてくれた。

まずは歩き方から、言葉の使い方。一人称を俺から私へと変え、なるべく丁寧な言葉で喋り続ける。

反射的につい「俺」と言ってしまうように、常に何度も自分の事を「私」と言った。

他にも髪の洗い方や、纏め方、食事でのマナーに生理用品の使い方から、この先知ってて困らない事を色々と教えてくれた。

「……怖くないですか？」

ふと、千秋は一生懸命女の子に成り切ろうとする義孝に疑問をぶつけた。

自分が自分ではなくなる。身体からして既に違うのに、これ以上変わってしまったら自己同一性が崩壊してしまうのではないかと心配した。

「うん、偶に凄く怖くなる時があるよ。自分が自分じゃない誰かみたい……本当の自分を知っているからこそ、余計にね。でも、人は変わるものでしょ？」

「それに、お、じゃなくて私は……誓ったんだ。強くなって、皆の分まで幸せになるってね！」

そう言つて自然に笑う義孝を、千秋は眩しそうに眺めた。まだ子供故に柔軟性が優れているのか、偏見を持たずにありのままを受け入れられている。

「（強いですね、この子は……。もしかしたら私のした事はお節介だったのかもしれないね）」

ずっとこのままの環境でいたいと思つたことは誰にでもあるだろう。しかし、変化に対応出来ない人間は衰えて排除されるのが現実。

何時までも自分らしくいる為には、人は変わる事を恐れてはならないのだ。

回想（6）

いよいよ今日は退院日だった。早起きした義孝は御世話になった個室の病室を掃除し、布団のシーツを整え終えた所だった。

荷物は得になく、着替えや音楽プレイヤー等が精々。それ等は全て昨夜の内にリュックサックに仕舞い、今は自分の脇に置いてある。

現在は、とある人が迎えに来てくれるまで待っている所だった。

「伯父さんと会つのも久しぶりだね。お母さん達の葬式や、着替えとかも持ってきてくれたし、ホント頭が上がらないや」

伯父さん、そう義孝が呼ぶのは父の兄に当たる八条 玄^{はちじょう げん}。若い頃に妻を病気で亡くし、今は1人暮らしをしている30代後半の人だ。

そして、その人こそが義孝の待ち人である。まだ病み上がりの彼女を心配して、自宅まで送り届けてくれるらしい。

時計を気にしながら待つ事数十分。部屋の扉がノックされ、義孝が「どうぞ」と返事をする外から人が入って来た。

ボサボサの茶色の髪に、少しやつれた感のある顔。纏っている茶色のスーツは草臥れているが、それでも中々の男前だ。

「こんにちわ、義孝くん」

「うん。こんにちわ、伯父さん」

玄は嫣然と微笑みを浮かべ、その笑みに義孝も笑顔を返す。その翳りのない義孝の顔を見た彼は安堵したように息を吐いた。

矢張り精神的に追い込まれていないか心配していたのだろう。入院した当時は何度かお見舞いに来る事はあったが、あの時は今よりも純粹に笑えてなかった。

色々な人に心配を掛けてしまったと思いつつ、彼女はリュックサックを背負い、外に出る準備をする。

「それじゃあ、行こうか」

「分かった」

部屋を出る前に一度振り返り、義孝は頭を下げた。この約一ヶ月間、お世話になった病室に感謝を込めて。

病院の廊下を歩いて居ると、何処かへと向かっていた千秋とバツタリ会った。

義孝としても千秋には挨拶がしたかったので、丁度いい。目が合うと笑顔を浮かべ、「退院おめでとうございます」と言ってくれた。

「御世話になりましたっ！ また縁があつたら何処かで！」

「はい、また何処かで」

手を振る千秋に義孝と玄は頭を下げ、出口へと歩いて行く。千秋は
2人の姿が見えなくなるまでずっと見送っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2994ba/>

守護騎士

2012年1月14日19時50分発行